

## 「ムギと王さま」の子ども像

著者	芦田川 祐子
雑誌名	川口短大紀要
巻	23
ページ	143-155
発行年	2009-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000723/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000723/</a>



## 「ムギと王さま」の子ども像

芦田川 祐 子

### はじめに

エリナー・ファージョン (Eleanor Farjeon) の短篇「ムギと王さま」(“The King and the Corn”) は、1956年にカーネギー賞と国際アンデルセン賞を受賞した自選短篇集『本の小部屋』(*The Little Bookroom*, 1955) の第1話だが、この物語に関する評論は少ない。そもそもファージョンの作品自体、英語圏では全集も出ておらず、絶版になっているものが多いせいもあってか、あまり注目されてこなかった。ピーター・ハントは『子どもの本の歴史』で、ファージョンについて、「当時多くの作品を発表していた重要な作家」だったが、「時代の子であり、わずかな例外を除いては、(その名声にもかかわらず) 作品が第二次世界大戦後まで読み継がれることはなかった」(250) と解説し、時代と共に古びてしまった散文物語よりも、どちらかという子ども向けの詩の分野で彼女が足跡を残したと見ている。

一方日本では、ファージョンの散文物語は、岩波書店から石井桃子訳の作品集が出版されており、比較的よく知られているが、やはり細かく論じられてはいない。赤木かん子はファージョンを、「言葉の魔術師」、「素晴らしいストーリーテラー」(66) と絶賛し、「作家としての仕事(つまり物語書きね)のほとんどを、二十世紀前半に終えていながら、なおかつ、今でも現役第一線にノミネートされている書き手です」(69) というように、ハントと逆の評価を下している。赤木によれば、『ムギと王さま』には「バランスの悪さ」があまりなく、「おそらくファージョンで一番一般ウケする」(68) 本だという。ファージョンの作風については他に、国際アンデルセン賞を受賞しているせいもあってか、「作風、精神においてアンデルセンの系統を継ぐ作家」(西澤121) といわれたり、「民話風」(安藤202) と描写されたりする。アンデルセンや民話と結びつけられることによって、よく知られた伝統的な物語の一部として文学史上に残る可能性が広がる一方、逆に個性が認められず忘れ去られたり、古風で新鮮味のない作品として認識されたりするという不利な点も出てくるといえよう。

本稿では、「ムギと王さま」が描き出す子ども像に注目し、細かく読むことで見えてくるこの作品の特異性を探りたい。この短篇は日本語版で12ページ、英語版で6ページあるが、空白の

行を挟んで3つの部分に分かれている。本文中には数字は出てこないが、仮に番号をつけて第1部から第3部までとすると、第1部と第3部は「わたし」による「ウィリー」(Willie) 少年の紹介や二人の会話からなり、第2部はウィリーが「わたし」に語って聞かせた物語をそのまま引いた形になっている。ウィリーの物語をどうとるか、いわば「賢いばか」といった両義性をもつウィリー自身をどう解釈するかにかかっている。この作品の興味深い点は、こうした語りの構造にもあるが、めったに言及されない。たとえば、西澤による「ムギと王さま」のあらすじ紹介(120)は、第2部と第3部のウィリーの話の中身のみを扱っている。ウィリーの物語は印象に残るものであろうが、この短篇が語り手としてのウィリーや「わたし」をも描いていることを忘れてはならない。また安藤は、少年ウィリーは「気まぐれではあるけれど、すぐれた語り手として」村人たちに可愛がられている(203)と指摘するが、「そして、そのことをも含めて、ウィリーが語りだす『ムギと王さま』は、どこかでトルストイの童話と交差するものがあるように思われる」(203-04)と続け、「わたし」との関係には触れない。これまで見過ごされがちだった、物語る行為や、大人と子どもの関係に焦点を当てた時、この物語からどのような考察が導かれるだろうか。ウィリーおよび「子ども」について、どのような描き方がなされているか、細かくたどっていくことにする。

## 1. ウィリーの人物像

ここでは第1部を中心に、「ウィリー」という登場人物がどのような存在として造型されているかを分析する。作品の書き出しを見ると、特別な人物についての話だと強調されていることがわかる。

村に、ひとりのばかがおりました。ところが、それが、どうして、ふつうどこにでもいて、使い走りなどしている「村のあほう」とはちがいました。その子は、校長先生のむすこだったのです。そして、もとは、その先、何を望んだらいいかわからないような天才児のひとりでした。(17)

話題となっている人物の名はまだ明かされず、属性による紹介である。ここでは、「ばか」(simpleton)と「あほう」(idiot)が区別されている。この物語の中心となる人物は、いわゆる知的障害という枠の中でも、「村のあほう」より、身分も生来の知能も高いということが示唆されている。初めから「ばか」だったわけではないが、「ふつう」の存在でもなかったことは確かである。知性も権威も備えた校長という存在を父に持つ点で一目置かれ、他の子より知的に発達の早

い「天才児」(precocious children)の一人として、現在の「ばか」と正反対の目立ち方をしていた。

「天才児」がいかにして「ばか」に変化したかという点、父親の教育法のせいであることが暗示されている。すなわち、高い期待を抱いた父親が息子に「むりやり、本をつめこ」んだ(forced him to live in his books (1))結果、息子が10歳になった時、その「すばらしい頭」が、鈍くなったところか、「ぜんぜん、働かなくなってしまった」(17-18) (It was not that the boy's bright wits turned dull, he lost them altogether. (1)) というのである。「むりやり」ということは、子どもは本に埋もれて暮らしたいと思っていなかったわけで、書物のみによる教育に対する子どもの拒否反応ともとれるが、ある限界を超えると、積み上げたすべてが消去されるというイメージを提示し、天才と狂気は紙一重というように、両極端と見えるものの親和性に注意を向けさせているようでもある。

しかしながら語り手はこの直後、「でも、それは、ほんとうだったのでしょうか？」(18)と疑いを差し挟む。この子の知性は失われていないかもしれない、というより、語り手にとっては失われていないように見えると述べているに等しい。

その子は、畑にすわって、ただニカニカ笑うだけで、何かの拍子で舌がゆるみだすまでは、めったに口をきかなくなりました。が、いったん、ゆるんだとなると、とめどもなく話しつづけました、ちょうどこわれていると思ったオルゴールが、ふいにつつかれて、じぶんの歌をしまいまでうたいつづけるのと、おなじように。(18)

天才児だった時は勉強部屋で書物に囲まれていたであろう少年は、「ばか」になってからは屋外で笑みを浮かべていることが多く、本には「見むきもしない」。しかし屋外といっても、自然の野原にいるわけではなく、人間が食糧を作っている「畑」である。他人との交流は途絶えておらず、たまに話し出すこともある。ここでは少年の話をオルゴールの歌になぞらえているが、それは同じものが繰り返し出てくることを仄めかすと共に、少年の頭が実は「こわれて」いないということも示している。文字が声に取って代わったという状態で、少年の口から出てくるものは、以前につめこまれた本から得られた知識かもしれない。

この直後、「どんなときに、ふいにつつかれたら、『お人よしのウィリー』が話しはじめるのか、それは、だれにもわかりませんでした」(18)という一文で、初めて少年の名が明かされる。カギ括弧に入っていることで、それが一種の渾名であることがわかる。物語の初めで「ばか」と紹介されたように、ここでもウィリーという固有名の前に「お人よしの」(Simple)という属性の説明がついている。この「お人よし」は、「ばか」の言い換えであり、オルゴールという機械の

ように単純で人間離れしているという含みもあるかもしれないが、少なくとも日本語では（そしておそらく英語でも）、「ばか」よりも肯定的なニュアンスが強い。実際この呼び名は、ウィリーの父親には不評だが、村人たちがウィリーを「いとしがって」（19）つけたものだとされている。

お人よしのウィリーの話し出すきっかけはわからないというものの、本ではないらしいということが述べられている。

ときどき、校長先生は、ウィリーのだいすきだった本を、その鼻先においてみました。けれども、ウィリーは、そのような昔話や伝説には、気もなさそうにチラと目をやるだけで、ふらふらと歩いて行って、新聞をとりあげます。

ファンタジー的な要素をしばしば持つ大昔の物語や記録に対して、現代の現実的事象を扱った「新聞」が対比されており、ウィリーは天才児だったころ「昔話や伝説」(old tales and records (1)) を好んでいたということがわかる。それらにもはや興味を示さないのは、既に頭の中に入っているからかもしれない。実際、後ほどウィリーが「わたし」に語って聞かせるのは、「何百年も、何千年も」（27）前のエジプトでの話である。ウィリーが昔話や伝説をつめこまれて「ばか」になったといえなくもないが、「だいすきだった」のであればその種の本は強制されずとも読んだであろうから、原因は別のところにあったとも考えられる。今のウィリーは、好きだった本よりも新聞を選ぶが、「たいていは、その新聞も、すぐおいてしま」う（18）。めったに話をしないのと同様、文字も読まないということであろう。しかしたまに話し出すのと同じように、時には何か「たいていは、つまらないことが書いてあるところ」（18）を1時間もにらんでいる。「つまらない」(of a trifling character (1)) と判断しているのはウィリー以外の人間だと思われる、ウィリーの頭の中で何が起きているかは窺い知れない。

このように、ただの「あほう」ではないウィリーは村人たちに愛されており、村ではお客が来ると「自慢にして、指さして見せ」（19）さえする。ウィリーの容姿は次のように描写されている。

ウィリーは、目だって美しい若者でした。髪はうす茶色で、はだは白く、金色のそばかすがありました。青い目は、子どものようにいたずらっぽく、邪気がありませんでした。そして、形のよいくちびるは、にっこりすると、とても人の心をひきつけました。

あれがウィリーだよと、わたしがはじめて指さして教えられたとき、ウィリーは十六か十七でした。（19）

原文には「若者」という語は出てこず、彼が際立って美しい (He was singularly beautiful (2)) と述べているだけだが、16歳か17歳では「子ども」とは見なされないらしい。「金色の」そばかすは、後に問題となるムギの金色と響き合い、肯定的に捉えられている。青い目が「子どものよう」 (blue eyes sly and innocent like a child's (2)) だという表現には、実際は子どもではないという含みがある。ここでいう「子ども」は、茶目っ気はあっても悪気はない無垢な存在として想定されている。一方で、ウィリーは子どもではないが「子どものよう」な性質を備えており、人々に愛されている。また、10歳の時から「ばか」になっており、それ以降は内面的に変化していないようである。ここでのウィリーは、完全な大人でも子どもでもなく、賢いのか愚かなのかも曖昧な存在として描かれているといえる。そして、語り手の「わたし」がここで初めて物語中に登場し、それまでに述べられてきたウィリーの描写も、8月ひと月の客として村を訪れた「わたし」が見聞きして集めた情報によるものであったことが暗示される。この「わたし」は、日本語訳では第3部で「あるはずね」、「金色だわ」、などと女性言葉で話しているが、原文ではカブトムシ石つきの時計の鎖を持っていて、8月をその村で過ごしていた人としかわからない。時計の鎖という持ち物や、村人にウィリーを紹介されるといった付き合い方から、大人であろうという見当はつく。

「わたし」はウィリーに好意と敬意を持って接している。ウィリーを見れば挨拶したらしく、「二週間ほど、ウィリーは、わたしのあいさつににっこり笑ってこたえるだけでした」(19)が、ある日ウィリーの信頼を得たと見え、刈り入れ中のムギ畑で彼の話を聞くことになる。ウィリーの話し出したきっかけというのが、「わたしが時計のくさりにつけていたカブトムシ石」(19-20)であった。「カブトムシ石」(スカラベ)には訳注がついており、「昔、エジプトでは甲虫類を、再生、豊作のしるしとして尊び、宝石、石などで、その形を彫り、印や飾りに使った」(28)という。いわば自然を模倣した人工物であり、毎年まかれて実るムギなどの作物と共通する点がある。ウィリーは「わたし」のわきで横になり、「わたしのほうを見むきもしないで」(19)カブトムシ石に触って、自分が幼かったころの古代エジプトでの体験を話し始める。この場合は、ムギおよび神聖な遺物による連想と、その持ち主である適切な聴き手の存在が、ウィリーの舌をゆるめたのであろう。

## 2. 語る子どもと語られる子ども

「そして、きょうに話しはじめました」という一文で第1部が終わった後、1行空いて始まる第2部は、時間も空間も第1部とは違う設定になっており、内容からするとウィリーが口頭で語った物語でできている。日本語訳では、第1部と第3部で「わたし」とされている語り手の1人称

が、第2部では「ぼく」であり、第1部と第3部が敬体であるのに対して第2部は常体で語られるというように、前後との違いが強調されている。しかし、原文でも訳文でも、第2部全体は引用符には入っていない。前後の空白が引用符の代わりとして働いているともとれるが、全体の語り手である「わたし」と、第2部を語るウィリーの1人称とをあえて区別しないことによって、「わたし」とウィリーの近しさを表現したと解釈してもよいだろう。ウィリーのある意味で途方もない話を聞いた後も、第3部で「わたし」はそれを受け入れてウィリーと会話し、共に行動している。

前述のように第1部のウィリーは、大人とも子どもともいいきれない存在であるが、第2部は「ぼくが、エジプトにいて、まだ小さかったころ」(20) (When I was a boy in Egypt (2)) の話であり、エジプト王に「子ども」(child (3)) と呼びかけられている。すなわち、第2部の「ぼく」は古代エジプトにいた子どものウィリーであると同時に、それを自身の記憶としてイングランドで語っている、完全な大人でも子どもでもない存在のウィリーでもある。第1部のウィリーには台詞がないが、第2部と第3部のウィリーは他人と会話している。ここではまず、第2部で語られている子どもとしてのウィリー、すなわち古代エジプトでのウィリーの言動に焦点を当てて、そこから見えてくる子ども像を探りたい。

小さかったウィリーは、父のムギ畑でムギをまいて生長を見守り、毎年ムギが金色に実ると、「ぼくのおとうさんは、エジプトじゅうで一ばんのお金もちだ」(20) と思っていた。ウィリーにとって、黄金ではなく金色のムギが「お金」すなわち宝 (the richest treasure (2)) だと認識されていることが読みとれる。この父の豊かさに対照されているのが、エジプト王のラーの豪勢さである。

ぼくは、みんなが王さまの話をするのをきくのがすきだった。まるでおとぎ話の王さまのように思えたからだ。けれども、王さまが、ぼくのおとうさんのように生きている人間で、王さまの金のマントが、ぼくたちのムギ畑のようにほんとうのものだとは、ぼくには思えなかった。(20-21)

ウィリーにとっては「おとぎ話」と「ほんとう」の世界が分かれており、両者は違う種類の豊かさを持っている。おとぎ話はウィリーからすれば現実感がなく、聞くのは楽しいが理解を超えた贅沢に満ちているのだ。「光るものすべてが金とは限らない」(All that glitters is not gold) という諺があるが、ウィリーは王のマントに価値を見出さない。

ウィリーはある日ムギ畑で、「日にギラギラと輝く」(glittered in the sun (2)) 装いのラー王に会うが、その時の会話は、ウィリーが「ほんとう」の世界では自分は最大限の幸福を得てい

と考えていることを示している。ムギの穂をむしって1粒ずつ食べているウィリーに、王は笑って声をかける。

「子ども、おまえは満足げに見ゆるな。」

「ぼくは満足です、ラー王さま。」と、ぼくはいった。

「おまえは、まるでごちそうのようにそのムギをたべておるな。」

「これは、ごちそうです、ラー王さま。」と、ぼくはいった。(22)

王が笑うのは、ありふれた少量の穀物に満ち足りている「子ども」のウィリーが、世間知らずに見えるからであろう。ラー王にとって、何も手を加えないムギは「ごちそう」の範疇に入らないが、ウィリーはごちそうだと言い張る。ウィリーにとって、ムギは金色であるばかりでなく食べておいしいものでもある。王はウィリーの素性を尋ねるが、その返事からも、ウィリーの「ほんとう」の世界では父とムギ畑が富を代表していることがわかる。

「子ども、おまえは何者だ？」

「ぼくのおとうさんのむすこです。」と、ぼくはいった。

「して、おまえの父親は何者だ？」

「エジプトで一ばんの金持ちです。」

「どうしておまえに、それがわかる？」

「おとうさんは、このムギ畑をもってます。」と、ぼくはいった。

「ぼくのおとうさんのむすこ」(My father's son (3))という言い方は、生物学的には当然のことで、何の情報も付け加えていないようだが、この子どもが自分を父親に従属するものと見なしていることを示している。王もそれを察して今度は父親の素性をたずねる。ウィリーは父親の名前や職業を答えたりはせず、父の属性として自分の信じているもの、すなわち金のムギとのつながりに言及する。この二人の会話での役割分担ははっきりしており、王が質問したり自分の主張を述べたりすると、ウィリーはそれに対して答えたり首を振ったりするだけである。王が会話の主導権を握っているようでありながら、「子ども」に教えを乞うているようでもある。王からすれば、この子どもの無知と自信は苛立たしいものである。

ラー王は、そのキラキラする目で、ぼくたちのムギ畑を見やり、そして、いった。

「わしは、エジプトをもっている。」



そこで、ぼくはいった。

「それは、あんまりたくさんすぎます。」(22-23)

ウィリーにとって、エジプトが「たくさんすぎ」(too much (3)) るほど大量であることはわかるが、それを所有することが「金持ち」(rich) とは考えられない。ここでのウィリーは、多すぎる富は豊かさを保証しないと言いたいかのようである。一方でそのしばらく後、王が金のマントを自慢すると、ウィリーは、この畑を持っている「おとうさんの金は、それよりずっとたくさんあります」(23) と答える。目の前のマントに使われている金の量よりも、金色のムギの方が多いため、父親の方が金持ちだというのである。ここでは量が問題になっており、先の考え方と矛盾するようでもあるが、ウィリーにとって「エジプト」と「ムギ畑」は、「おとぎ話」と「ほんとう」の世界のように対立しており、そもそも同じ基準で量れるものではないのだろう。そしてその「ほんとう」のムギの量というものは、一度にとれるだけでなく、毎年収穫できるものであり、無限だということが示唆されている。王が畑を焼いたらどうするかと尋ねられたウィリーは、自分の父親には「またそのつぎの年のムギが」(23) あると返事して、王を怒らせる。

「エジプトの王は、エジプトのムギよりもえらいのじゃ。」ラー王は、さげんだ。「王は、ムギよりも金色に輝いておる！ 王の命は、ムギよりもながいのじゃ！」

これは、ぼくには、ほんとのことに思えなかった。そこで、ぼくは首をふった。(24)

ここでは、「えらい」(great) ことと「金色に輝いて」いる (golden) ことと、より長い命を持つ (outlast) ことが同一視されている。ラー王とウィリーの父とどちらが金持ちであるかの論争は、ここで王とムギとのどちらがより金色であるかという表現に変わっている。年齢や身分は違うものの、二人とも正直であり、知恵も互角といえるのか対等に争っているが、もはや根拠を述べて相手を説得する段階になく、王は言葉により、ウィリーは身振りにより、互いの信念を表明しているだけである。

ラー王はこの後、護衛の兵を使って畑を焼き払わせ、無知で無礼なこの「子ども」をこらしめて去っていく。実力行使に出られるとウィリーは無力であり、なぜムギを焼かれたか「そのわけがわからなかった」(25) ので、父親に理由を訊かれても答えられず、裏の小さな畑で泣く。ここでは、正直に振る舞ったあまり、理解の及ばないことで一方的に虐げられた弱い存在のようである。しかし、涙を拭こうとしてウィリーは手の中にムギの穂が半分残っているのに気づき、その「ぼくたちのもっている最後の最後の宝」を畑にまく。その夏ラー王が死ぬと、埋葬用のムギを運ぶ男がウィリーの家に寄った時に、ウィリーは畑に育った10のムギの穂すべてを荷に紛れ

込ませる。その結果、「人びとは、はなやかな儀式をして王さまを葬ったとき、ぼくのムギも、王さまと一しょにうずめた」(27)のだった。ウィリーの機転で、「おとぎ話」の葬式に、「ほんとう」のムギも参加し、墓の中でどちらがより「金色」かを比べてみることになったのである。

第2部は以上で終わり、1行空いて第3部は、「お人よしのウィリーは、そっとわたしのカブトムシ石をなでました」(27)と、再び「わたし」の視点からの、語る者としてのウィリーの描写に戻る。再生と豊作をもたらすカブトムシ石の力が続いているように、第2部の物語をウィリーが続ける形で、二人の会話が引用されている。

「ウィリー、それでおしまい？」わたしはききました。

「いや、まだ少しある。」と、ウィリーはいいました。「何百年も、何千年もあとのこと、じつは、去年のことなんだが、エジプトにいた、いく人かのイギリス人が、ラー王の墓を見つけたんだ。」(27)

ウィリーの話によれば、ウィリーがエジプトで子どもだったころというのは、「何百年も、何千年も」(hundreds and hundreds of years)昔のことだったのだ。文字どおりにとれば、ウィリーは何千年も生きているか、転生しているかだということになるが、「わたし」は口を挟まない。ウィリーが言うには、去年見つかったラー王の墓にあった「金色の道具類は、日の光にあたると、もろもろとくずれた」が、ウィリーのムギは残っていた。おとぎ話のように豪華な金の道具は長い年月の後太陽に耐えられないが、ウィリーにとって「ほんとう」の富だった金のムギは墓の中でも生命を保ち、もともと屋外で育つので日光はむしろ力の源である。イギリス人たちがそのムギの数粒を持ち帰ってきて、かつてのエジプト人のようにウィリーの家に寄った時、まさに自分のものであるそのムギ(my very corn (6))を自分も手に取ったと話しながら、ウィリーは「わたし」に「はればれとした笑顔」を向ける。ウィリーは「わたし」がラー王と違って好意的な聞き手であることを疑わない。第2部でのウィリーはものを言ったり首を振ったりしているとしか描写されないが、第1部と第3部ではしばしば「にっこり」しており、自らの幸福感と相手への親愛の情を表している。

エジプトから長い年月を経てイギリスに運ばれたウィリーのムギのうち、1粒がウィリーの手に残り、ウィリーはそれを今いる畑の真ん中にまいたと言う。二人はそこを見に行き、「ほかのどの穂よりも高く、どの穂よりも輝いてい」るムギを(28)発見する。「あれが、そのムギ？」と問う「わたし」に、ウィリーは「いたずらっ子のように」(like a sly child)にっこりすることで肯定の意を表す。確かにその穂は他のより金色だと言う「わたし」に、「エジプトの王さまとムギと、どっちが金色だ？」(How gold's the King of Egypt? (6))と問うてこの物語が

終わる。ウィリーは王に対しても「わたし」に対しても、質問に答えたり物語を語ったりする側であり、自ら質問文を発するのは初めてのことである。これはラー王とウィリーのどちらが正しかったかという質問でもあるが、初めからその答を含んでいる。

エジプト王の命や名声は長くないという主張は、既に第2部のウィリーの語り方からも読み取れる。第2部を語る存在としての、すなわち「わたし」と共にイギリスのムギ畑にいるウィリーは、多くの場合、回想され語られている存在のウィリーと重ね合わせることができるが、明らかに過去と分離して自分の語る方法について述べているところが、第2部の初めの方で1箇所あるのだ。

そのころ、エジプトには、たくさんの名まえをもった王さまがいた。王さまの名前のうちで、一ばんみじかいのは、《ラー》だった。だから、その王さまを、ぼくは、ラーとよぶことにしよう。(20)

過去形で書かれている中で、ここだけ「よぶことにしよう」(The shortest of his names was Ra, so that is what I will call him (2))と、未来の形が使われている。語り手ウィリーはなぜ、エジプト王の数ある名の中から「一ばんみじかい」ものを選んだとわざわざ断っているのだろうか。ここでは、聞き手が「そのころ」のエジプトにおける習慣やこの王を知らないであろうことが想定されている。すなわち、エジプト王の名前がたくさんあったということが、常識とはみなされておらず、説明を要すると思われる。名前が多いということは、人々によく知られていたり格式が高かったりするということであろうが、語る存在のウィリーや聞き手の「わたし」がいる現在では、もはやこの王は無名であり、何と呼んでも構わないのである。いわば、改めて命名が行われ、そこで一番短いものを選ぶことによって、この王と「短さ」を強く関連づけている。名前は多くても長くても無意味であり、王の名声はムギよりも短いと暗示されているのだ。ウィリーの語りの中で、語られる子どもとしてのウィリーは王に真実を語ったことが証し立てられている。ウィリーを語る「わたし」から見てどうであるか、そして読者が「わたし」やウィリーをどうとるかは、また別の問題である。

ウィリーにとっては、「おとぎ話」の王よりも、「ほんとう」のムギの方が豊かで長命であり、ウィリー自身もラー王より「金色」であった。第1部で描写される、「ばか」になってからめったに話さなくなったウィリーは、王の墓で眠るムギのようでもある。発掘されて日の目を見たムギが発芽するように、何かのきっかけで話し出すのである。しかし「ムギ」と「王さま」とは、それほど対立するものではないとも捉えられる。ウィリーのムギが保存されていたのは、エジプト王の墓と一緒に葬られていたからで、それによってイギリスに運ばれることにもなったのだ。

新約聖書に、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」（ヨハネ伝 12 章 24 節）とあるように、死して得られる命もあり、ウィリーのムギがイギリスで金色に実ったのは、死んだラー王のおかげだともいえるのではなかろうか。第 2 部を聞いている「わたし」にとっては、過去のウィリーもおとぎ話の登場人物のように思えるかもしれず、王とムギ、おとぎ話と現実の関係は、ウィリーが提示するよりも近しいものだとも読める。

### 3. 痕跡の「子ども」

以上のような、「ムギと王さま」の子ども像の描き方は、どのような点で興味深いといえるだろうか。一つには、この作品が扱っているのは実際には登場しない子どもだということができる。第 1 部や第 3 部で、ウィリーに関して、「子どものよう」だと述べる時、その「子ども」のイメージは、純真でいたずらだというロマン主義的な子ども像にのっとっているが、そのような子どもは登場人物として出ては来ず、ウィリー自身も子どもではない。第 1 部で明かされるウィリーの生い立ちは、「わたし」が又聞きで後にまとめたものであることが示唆されている。また、第 2 部は子ども時代のウィリーの話であり、そこでのウィリーは素朴で無力ながら真実をついた発言をしているようだが、子どもではないウィリーが 1 人称で語っているため、フィルターを通した子ども像として現れてくる。つまり、自分について語るウィリーがおり、それについて語る「わたし」がいることによって、生の「子ども」であったウィリーに触れることはできない仕組みになっているのである。児童文学にはしばしば、子どもに物語を聞かせる大人が登場するが、「ムギと王さま」では、子どもと大人の中間にいるウィリーが、おそらく大人である「わたし」に子ども時代の自分について語る、という点でも珍しさがある。この作品の子どもは痕跡であり、イメージや物語の中にしか存在しない。

また別の見方として、ウィリーは「賢いばか」であり、その意味で年齢に関わらず、「子ども」の両義性を体現しているとも見ることできる。レズニック＝オーバースタイン (Lesnik-Oberstein) は、20 世紀において、子ども時代というものは、墮落に対する「無垢」(innocence)、自意識に対する「無自覚」(unselfconsciousness)、「無知」(ignorance) の状態として、見る側の目的に応じ、敬意と保護だけでなく、軽蔑や統制の対象ともなると指摘している (74)。日本語ですべて「無」がつくのを見てもわかるように、大人の「有」の状態の対極として造形されているのが子ども時代であり、大人に対して持ち上げられたり貶められたりする。無知であるがゆえに知恵を持つ、というような賞賛は軽蔑の裏返しであり、異質なものとして認識されている点では変わらないのだ。頭が「無」になったウィリーは、「お人よし」と言われて村人たちに愛

されており、父親はその渾名を悪口のように感じて嫌っている。語り手の「わたし」はウィリーに敬意をもって接し、「ばか」ではないと仄めかしているが、どちらにしろウィリーは、これらの大人の仲間には入らない特別な存在である。

成長という概念とのつながりを考えると、「お人よしのウィリー」が特異なのは、10歳までは一般的な子どもを超えた早熟の天才児だったといわれ、それ以降子ども時代に逆戻りしたように見えることである。「無」から「有」へという一般的な成長の図式に当てはまらず、「有」から「無」へと進んで停止した、大人にならない子どものようである。もっともこれは、「わたし」の得た情報に基づいたもので、ウィリー自身の認識では、古代エジプトで少年時代を過ごし、今は数千年後のイギリスにいることになっている。その間にどのような軌跡を描いたかは述べられていないが、やはり通常の人間の一生の概念とはかけ離れているといえよう。

成長と相容れない永遠の少年というピーター・パンである。ジャクリーン・ローズ (Jacqueline Rose) は『ピーター・パン』の事例を分析し、児童文学の「子ども」は、純粹で根源的な存在として、言葉やセクシュアリティや国家の不安定さといった問題から大人を救済し、世界を統御し得ると思わせるように働いていると指摘した (8-9)。「ムギと王さま」の描く子ども像は、過去の子どものあり、現在にはその痕跡しか残っていない。そして以前子どもであって、現在は大人と子どもの中間に位置するウィリーは、成長の概念に逆行する、「天才児だったばか」という特異な存在である。「わたし」はそのウィリーを描写し、ひと時ウィリーと同一化して古代エジプトの物語を語り、再び外からウィリーを描くが、ウィリーやその物語をどう捉えているかについて断定的な意見を挟まない。物語が2重3重の声で語られる作りになっており、誰が誰に語っているのかを一元化できないようにすることで、言葉を制御することの困難を示しているともいえる。ウィリーの物語の信憑性は、王とムギとどちらが金色かという問いと答えほどは大切でないように見えるが、その「金色」の意味も1つではなく、移り変わっている。この物語は言葉の流動性に注意を促し、根源的な知り得る子どもの存在を否定するかのようである。「ムギと王さま」という作品が一部の人々の賞賛を得、大部分からは忘れられているという現状は、ローズが読み取ったような児童文学の流れから外れていたせいでもあるかもしれない。

#### 引用文献

- 赤木かん子『かんこのミニミニ世界児童文学史——図書館員のカキノタネ』図書館流通センター、1994。  
 安藤美紀夫「ムギと王さま」『世界児童文学100選』日本児童文学別冊、昭和54年、202-205。  
 西澤喜代美「イギリスのアンデルセン エリナー・ファージョン『ムギと王さま』」『たのしく読める 英米児童文学』本多英明、桂宥子、小峰和子編著、ミネルヴァ書房、2000、120-21。  
 ハント、ピーター編『子どもの本の歴史——写真とイラストでたどる』1995、さくまゆみこ、福本友美子、こだまともこ訳、柏書房、2001。

- ファージョン, エリナー『ムギと王さま ― 本の小べや 1』石井桃子訳, 岩波少年文庫, 2001.
- Farjeon, Elenor. *The Little Bookroom*. 1955. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- Lesnik-Oberstein, Karin. *Children's Literature: Criticism and the Fictional Child*. Oxford: Clarendon Press, 1994.
- Rose, Jacqueline. *The Case of Peter Pan or The Impossibility of Children's Fiction*. 1984. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1993.

(2009年12月17日提出)